The 11th Landscape Fukuoka ESSAY

第11回 福岡市景観エッセー

都会の空洞

前田 留美 ● Rumi Maeda
福岡市中央区

『都会の空洞』私はこの場所をそう呼んでいる。

灰色のビル街に忽然と現れたオアシスのように、人々はそこに集う。木々の隙間から差す陽の光りに、泉の水面はキラキラ輝き、優しく風が吹き抜ける。

お昼休みになると、たくさんの人がこの場所に訪れ、しばしの休憩を思い思いに過ごす。

どの人の顔も穏やかだ。

隣のビルに勤務している私にとっても、そこは特別な場所。天神2丁目福岡銀行本店広場。この、普段は穏やかな空間が時折音楽ホールへと変身するのを、どれだけの人が知っているだろうか。

ボーボーっと、チューニングを始める重低音。それに重なるように、いくつもの楽器が高音を響かせる。そこは放課後の学校でも、音楽スタジオでもない。

閉めきった部屋へと微かに入ってくる音楽に耳を澄ませる。5階のフロアから見るそれは、まるで都会のコンクリート砂漠に迷い込んだ小さな音楽隊。仕事で忙しく働いている人々へ、音楽を届けるためにやってきたかのようだ。

いや、きっと彼らもオアシスを求めてここへたどり着いたのだろう。そんな空想さえ広がるような、この非日常な空間が私はとても好きだ。

「窓、開けようか。」部長の気の利いた一声で、電話の音しか鳴らないオフィスが音楽ホールの客席となる。それも特等席だ。お昼休みが終わると、素敵な音楽を響かせていた彼らは消え、そこはまたいつもの広場へともどる。静かで穏やかな『都会の空洞』へと。

ビルの窓から『都会の空洞』を眺める、筆者の幸せそうな横顔が目に浮かびます。生演奏を特等席からとは、羨ましい「とっておきの景観」ですね。都市景観賞受賞の吹き抜け空間建築が、確かに活かされていることを感じます。

（審査委員　中村 敏子）

夏のとき

牛尾 佳渚 ● Kana Ushio
福岡市中央区

自宅の扉を開けると、目の前には魚市場と荒戸大橋が広がる。まるで、ポストカードを見ているような景色である。特に、夏の夕方は濃い潮の香りと荒戸大橋の奥に夕闇に染まる島々、そして沖へ出る漁船と一際明るい輝きを灯した納涼船。ため息がでるほど美しい。

しかし、私はこの景色が切なくて仕方がない。そんな気分にさせるのは、博多湾に浮かぶ納涼船の姿である。

私が小学生の頃、夏の何年間か続けて、家族で納涼船に乗船していた。母は泳げないにも関わらず、水辺が好きだったため、唯一私と妹を連れて夏を過ごした水辺が、市営渡船納涼船であった。博多湾を一周しながら、志賀島に停泊し買い物を楽しむ。3人で手を繋ぎ、夏祭りのような出店に心が躍った。

しかし、この長いようで短い船の旅が終わると、家族の夏は終わってしまう。そして、母は私たちを残し仕事に戻って行く。この切ない記憶が、納涼船が浮かぶ夏の博多湾を目にすると蘇る。

いつからだろうか、夏恒例となった納涼船に乗船しなくなった。きっと私が母の誘いを断ったのだろうと思う。夏休みを友達との付き合いや部活で過ごすという理由で。

母は今でも、夏の時期に玄関前に広がる景色を目にすると、私たちを船に乗せたことを懐かしそうに話をする。

もし母の中でもう一度私たちの手を引き、あの夏と同じ思いを過ごしたい気持ちがあるのならば、今年は、10年ぶりに帰郷した妹と一緒に納涼船に乗船してみよう。

今年の夏の終わりには、いままで切なかった景観が、とっておきの景観となることを期待して。

ポストカードのような典型的な風景に、個人の経験が時間軸をともなって重なり合わさり、どこにもない特別な風景が現れる。このエッセーの面白さは、いつもの風景が見る人の心によって変化するさまを叙情的に語りながら、その感動が個人の思いを超えて普遍性を持っていることである。

（審査委員　池田 美奈子）

とっておきの景観

荒木 好美 ● Yoshimi Araki
福岡市早良区

私にとって、「とっておきの景観」と云えば、愛宕神社の境内から眺める風景だ。

三十年前、初めてこの地に立った時、紺碧の海の向うに能古島が見えた。それだけの記憶しかない。しかし、街は変った。愛宕の森の向うに立ち並ぶ高層マンション、高速道路、福岡タワー、ホテル、福岡ドームの屋根の半径、今、生きている福岡だ。

個人的には、次女が勤めた店も、三女が通った女子高も、そして何より、私自身が死を覚悟して手術に挑んだ病院も、すべて一望できる。何度、この地に足を運んだことだろう。愛宕の神にすがった日々。境内からの眺めも時に涙でかすむ日もあった。術後、己の体力を試すがごとく、神社の石段を登り詰めた。

街は、変わる。そして人も変わる。

それが時代であり、生きている証だ。

願わくば、豊かなる愛宕の森は、変わる事なく、野鳥の住家であって欲しい。

本作品は、高台から望むことができる福岡市の街の風景を、自身の経験してきた時間の変化と対照させることで意味づけ、その魅力を短文の中にわかりやすく表現している。景観構成の視点から本作品をみると、眺望点として高台にある愛宕神社の境内が位置づけられ、また、景観要素として博多湾への眺望や建造物等が具体的に示されている。さらに、景観に求められる時間的な意味については、景観要素の変化と自身の人生経験の過程との対照を通じて、その意味の表現に成功している。このような表現を通じて記述された本作品は、愛宕神社の境内や道中と、そこから眺望できる街の風景に対する著者の愛着や願いがよく著された優れた景観エッセーである。

（審査委員　包清 博之）

トトロの森だ！こうの巣山は

石橋 沙弓 ● Sayumi Ishibashi
福岡市西区

私の大好きな映画「トトロ」。

始まりの音楽を聞くだけで心も身体もうきうき元気になる。

さつきのまいたドングリの種が、突然芽を出してぐんぐん大きくなって一晩で森になってしまう。不思議だった。本当にそんなところがあるのかもしれない、いつか見てみたいと思っていた。

そして小学生になった秋のある日、母に

「お散歩しよう。秋が見つかるかなあ」と誘われて双子の姉と

「歩こう、歩こう、私は元気ー。歩くの大好きー。どんどん行こう。」と2人で歌いながら歩くと20分足らずで着いた。

「ああートトロの森がある！」

と2人で叫んだ。母は、

「ここは、こうの巣山って言うのよ。家から近いでしょう。」

と言った。立ち並ぶ家々の道の向こうが森だった。

木が空まで高く伸びていて昼間なのに少し薄暗かった。2人ではしゃぎまわって、落ち葉の間のたくさんのドングリを夢中でポケットに入れた。

ドングリを拾っているおばさん達が教えてくれた。

「このドングリは、マテバシイ。いって食べるとおいしいよ。」

ってね。

この森には不思議な力があった。

初めて会う人がみんな笑顔であいさつしていく。

犬と散歩している人。ウォーキングしている人、すれ違う人みんな幸せそうな顔をしていた。

引っ越して4年半、私にとっては忘れられないトトロの森、こうの巣山。

ちいさな望みがおおきな自然に連なる夢想。マテバシイの残るこの山は、愛すべき里山の面影を伝える。自然の聖性と人間へのはたらきが、ひとりのこどもの目をとおして示された。彼女は、トトロを見たのかもしれない。

（審査委員　山下 三平）